

# 新たな共同体論への視角

——野本三吉『不可視のコミュニケーション』評

永 次 健

「本物」とか「人間性」とかいう関係を、ぶつ切り切ったところからしか関係の本質はみつからない。そうだとすれば、それは重苦しくはあっても、さほどの圧迫感と錯覚はなく、むしろ、さらさらにかわききった空洞にちがいない。

## I

自分がよりよく生きるためには、他人もよりよく生きなければならぬ。だから他人への積極的な働きかけをやるのだと人々は言う。しかし、自分なりに納得したことが他人にも納得できるとはかぎらない。

「皆さんの命をとったっちゃ、なんならん。そんなもん、皆さんにくれてやる。」

たった一つ、約束しちゃんない。あんだ、二度と労働者ちゅうことをいわんでくれんの。労働者ちゅうことをいわんでくれ。それだけば、おれに約束してくれんな。ほかの話はいらん。

そして二度と労働者の前に面だすな。  
たのむ………」

(森崎和江『園いとエロス』)

〈指導〉と〈領導〉が実態的にはほとんど変わらないように、〈自己主張〉と〈強要〉もさほどの相異はない。

「革命」という固定観念から、一時もはやくはやくは、ぼく自身を解放したい。

それは、人と人との関係の緊張部分と弛緩部分のはざまで知的優越性の自負や特権意識にすがって生きようとしていた自分の姿から、はやくぬけ出したいという感情のたかぶりでもある。

## II

今、静かにハイライトをふかしながら、『不可視のコミュニケーション』を読んでみる。

野本氏に一度も会ったことはない。が、何度も会っているような錯覚におちいってしまった。一行一行の文章の中に彼が生きている

のである。彼の「生命力」が、強引にぼくの体内の不燃焼部分を刺激してひきつけるのだ。

本書の構成は、次のようになっている。

- I 不可視のコミュニケーション
- II 山びこ学校への挑戦／無着式労働観の底辺／戦後児童史断章
- III 反学校コミュニケーションの原像／韓国ノート／放浪ノート
- IV 自治共同体試論／父母の論理・男女の論理／人間関係論への序章

「ぼくは人間の本質を、吸収と放出に見出ししているのだ。その二つの矛盾が、生き生きと、しかもかなりの早さと深さをもって行われる時、人間は最も「生きがい」を感じ、充実感を抱くだろうと、ぼくには思われるのだ。吸収と放出が激しければ激しいほど、ぼく自身は変質せざるを得ない。したがって、変質こそ、また生物としての人間の基本的な要素でもあるのだろう。そして、この変質を支えるものが〈関係〉であるとするなら、〈関係〉とは、この放出と吸収を最も円滑に行なえる時、質としても高いといえるのではないかと思う。

しかも、社会とは、こうした〈関係〉の総体をいうのだとすれば、社会の変革とは、この〈関係〉の変革以外ではないのだ。」

(人間関係論への序章)

野本氏の前述に従えば、吸収とは「食欲」であり、放出とは「自己表現の欲求」である。

ぼくが、この一冊の本の中でもっとも注目したのは〈関係〉の変革である。この視点がそれぞれのテーマをもった小論の根底に一貫して据えられている。

そして、これだけならば別に注目するに値いはしない。最近、とみにあらゆる分野で「関係の革命」「関係性の止揚」が問題提起されているからである。

が、ぼくは本書を慎重に読んでゆく中で、特に他の書物よりすぐれている理由を次のようなところに発見した。

〈関係〉という抽象的で具体的な実体を論理的次元へとむかわせるとき、複雑な諸構造をもっているという理由もあって、いつの間にか個体そのものの心的・生理的必然性の考察が捨棄されて、即時的な「関係」のほんの表皮の部分を現実的有効性をかちとりたという思惑と欲求で論求して、それがあたかも〈関係〉の革命の必然性をかたったかのような情況は、今も敵として存在している。

こうした有効性を自己目的化した思弁展開へと移行してしまう関係論の困難さを野本氏は実感している。だからこそ、あくまでも自己の問題意識の奥深いところを執拗に自問しながら生きぬいて来ている。

人間のいいない教育論、人間のいいない思弁的關係論を自己の存在の極限まで下向きせることによって「生き生きとした」自己をとりもどそうとこころみているのである。

が、熱っぽく必死なだけに逆に冷やかな部分と人間関係の動的性格が、論理の中で観念の円心運動へと自由自在に固定化されてしまいう危険性を充分に有している。

関係の変革ということばに含まれた意味の深さがどれだけの入止揚力Vを内包しているかということは、体験からくる感覚と感情の強さが共同体の内的関係と共同体間の外的関係との総合された論理の質をどれだけ保証しえるかということだろう。

そういう意味で、野本氏が高く評価する諸共同体は、窮極のあるべき姿を目ざしていることにおいて組織生産性や即時的効力しか眼中にない政治団体とは運動の対象と場所の次元を感覚的にも内容的にも異にしていることは確かである。

しかし、もう少し深く考えると、個体と集団の関係が必然的に個体の「自然宇宙にまで溶解してゆくような境地」にまで高められることによって共同体表現が可能とする論法は、純化された現実関係ならば、ある程度可能であるにしても、「国家の論理と相反する存在」としての共同体として成立しえない。というのは、日本人の共同体意識らしいものが、何故共同体間の諸問題になると他者への委任としてしか機能しえなかったのかということへの考察が△前共同体を克服することとしても重要に問われると思う。

現実の生活集団が、「国家の論理」を拒絶するということは、その集団に関係する諸形態の△反国家V的構造を事態化するということではあるが、生活集団が生活集団たりうるには、共同体間の関係と共同体内の関係を統合しうる視点を△他者への委任としてしか機能しえなかったV歴史構造の支配、被支配の関係と支配の側の内部と被支配の側の内部が奇妙に融合して共存してきた部分とのすべてを要する視点としてつくることであると思われるのではない。

うが、自分の力ではどうしようもないのだと考えて「教育しあう」関係を理想化してしまう。

頭の中では、あたりまえのことが現実関係の中ではあたりまえでなくなるこの意味の深さを、野本氏が「教師」をやめたときの気持ちと、社会的には当然、教師になることを余儀なくされているほど自身△教師になることを拒否するV位相は同じであるように思える。

「教師とは現実社会を肯定する立場に立たざるをえないのだということになり、本質的に体制的人間にならざるをえないのだ。……そして、体制としての日本資本主義国家は、基本的に、関係を、『もの』と『もの』とのそれとして固定化する。そして価値あるものとは、あくまで『商品価値』であり『交換価値』であり、金が多くある方が尊重されるのだ。したがって、人間もまた、商品化され、『労働力商品』として売買される。したがって、現在の社会体制を認めざるをえない教師は、『商品』としての人間を生産し、教室における人間関係をも、その流れの中で、物質化して、計量化せざるをえないのだ。」(「不可視のコミュニオン」)

この教師観は、教師のみならず、すべての人々が吟味しなければならぬであろう。

そして、あえて附言すれば△そうであればなおさら教師になるVという位相が現実存在するし、また存在しなければならぬというこの意味をも更にかみしめる必要があるように思う。

#### IV

人間のいない人間関係から、生まの人間関係へのつくりかえが新

#### III

「教師という職業は、そうした荒々しい生命力の伸張とは異質な体質をもっていて、多くの生き生きしていた生命力は、序々に押しこめられつつあったのだ。」

それは、いわば「教師」が、教える存在として自らを固定化させた時に起る硬直化であり、「生活」のリアルさとは切斷された「学校」という容器の中でくり返される、温室的、ままご的ミニチュウ性のなせる技であった。「学校」には、生命が、バリバリと音をたてて育っていくような迫力と野性がなかった。……：はくは、もっと「本物」に、生まの「生」にぶち当たった。オイオイと声をあげて泣いたり、歯をくいしばって苦しみに耐えたりして味わう「感激」の中で生きたかったのだ。」(「不可視のコミュニオン」)

引用がすこし長くなったが、野本氏の新たな共同体志向への直接的な契機をなす文章表現であり、無着成恭批判、反学校コミュニティの中にその主骨として生きている「本当の人間と人間との関係」への必死の接近でもある。そして、「教育」とは、「教育すること」でもなければ、「教育される」ことでもなく、まさに「教育しあう」こと以外ではないと断言している部分の意味の深さをほくは十分に味わいたい。その言葉は教育に関する書物を読めば必ず当然のごくお目にかかることはできる。

教師の例をとれば、教育現場の教壇に初めてたつときは「教育しあう」関係として△実践V化してゆく。が、いつのまにか「教育する」硬直化した関係の中に自分があるのに気づき、とまどってしま

しい共同体表現の窮極の課題である。

大沢正道氏が『反国家と自由の思想』の中でそのイメージをおおまかではあるが提起しているのですこし引用したい。

「職場や居住地にはじまり、われわれが参加しているさまざまな人間集団における人間関係を更新し、それを基盤として官僚に對置される大衆自身の直接民主制をさまざまな分野に拡大し、細胞分裂のように増殖し、ついには国家権力の機能を吸収してしまう路線を、ほくはこれからの革命過程に関する仮説の一つとして提起しておきたい。」

このような漸進的な変革が成立するためには、これまでの革命の主たるコミュニケーションであった一方交通の煽動宣伝にかわって、人間らしさを伝達し、説得する芸術や教育に大きな役割を演じさせなくてはなるまい。芸術や教育の自由が、言論、集会の自由とともに、かけがえなく重要になるのはこの意味においてである。」(「古典的革命観からの解放」)

こうした共同体へむけての野本氏の放浪は、「心境部落」「新しき村」「一燈園」そして「ヤマギシカイ」と続く。

ヤマギシカイに関して、全く知らないのほく自身の考えは保留をせざるをえないが、初めてヤマギシズムに触れたときの感想を次のように野本氏は述べている。

「その時の直観では、東洋思想に潜在している『無』の思想といったものが、クッキリとその中核をなしているように思えた。」

……今までの東洋思想の場合、『無』あるいは『エウ』(我執)の超越というようなことは、厳しい修業を通して、『個』の中でのみ体现しようとしたし、あくまで『個』の問題として、そこでと

どまっていたのだが、ヤマギシカイの場合には、それを集団的な規模で体現し、そのことよって、そこに一つの共存的世界を創り出そうとしているように思えた。』(「不可視のコミュニケーション」)

ヤマギシカイの特にすぐれている部分として、野本氏は直接民主制と無所有の考え方をあげている。この二つが基底になって「共同体」「共同生活」がおこなわれているという。

ただどうしても気になるのは、「共同体を志向する場合、ぼくは、現在においては、国家の論理と相反する存在として、共同体をとらえる。」という文章部分である。

これは、一見、正当にみえるが大変な落とし穴がある。相反する存在という意識が共同体自体のもつ質としてとらえられてしまうと、反国家を意識している人間の思弁の自由自在な固定化を生み、自閉的集団へと転落してしまう。そうではなく、共同体自体の論理の中に反国家の論理が内包されている。つまり、反国家即共同体ではなく、共同体内反国家としてとらえなおす必要があるように思われる。そうでないと、共同体自体の質的發展性はかちとられず、相互扶助・相互点検の原則は反国家意識があたかも共同体意識であるような錯覚におちいることよって、形骸化される。

ぼく自身の問題としてもいえるのだが、反国家即共同体という考え方を再度、その基礎構造から解体して批判的に論理化しなければならぬ。大変な課題である。たぶん、一生かかっても出来ないだろう。が、その百分の一だけでも可能にしたい。

※

自治共同体試論の中で、マルクス『ユダヤ人問題によせて』を検

討し、マルクス自身がいかにユダヤ人としての自己を解放したかという過程を「人間の解放」への希求だと野本氏は言う。そして、ユダヤ人国家再建というスローガンがユダヤ人にとって何であったのかということの問いと「日本人としてのぼく自身が、いかに自己を克服できるのかと無関係ではないのだ。」という自覚過程の視角に注目したい。

※

最後になったが、「父母の論理・男女の論理」はかなりの力作だと思ふ。

△夫婦▽を△男▽と△女▽の対関係としてとらえ、親としての△父▽△母▽も△男▽と△女▽の対関係としてとらえる必要性の提起は注目に値する。

それと同時に△おとな▽と△子ども▽との関係も人間と人間との関係としてとらえようとする考え方には基本的に賛成できる。

※

新たな地平への飛翔が、今まで住みなれた世界での全ての点検を余儀なくしてくるとき、人々は困難さと自己嫌悪感に悩まされる。進むところがそこしかないのだとわかってしまうと、今までの負い目や心的動揺はたちどころに雲の彼方へと消えてしまう。

新しい共同体への前進が、何も急に改まってよそよそしい思弁化をおこなうことではないとわかってしまった者にとって、それは、現在、すでにつくってしまった諸関係の変革をじっくり一歩一歩進めてゆくことに他ならないのである。

(社会評論社 七五〇円) (一九七一年・三・五)